

The BARBICAN CENTRE

11 Cromwell Tower, Barbican, London EC2Y8DD, ENGLAND

ロンドン、そこでは、あらゆる時代の建物が緑の空間と実に見事に調和していることに、人々は感嘆するであろう。現代の都市計画の混乱のただ中にありながら、町全体が、本来の“村”の魅力を失っていないといえるのではないか。ロンドンの中で、都市と田舎がどんなに混じり合っているか。それを肌で感じるのは、繁華街の Piccadilly Circus の近くでさえ、たとえば、Shepherd Market には、18世紀の村の性格が残っているところである。

ロンドンの中心部は、“The City”と呼ばれる約 1.6 平方 Km の商業・経済地区である。行政的にはロンドンと一応別で Lord Mayor と呼ばれる市長もあり、警察機構も分かれている。The Bank of England を中心に、このあたりには、毎朝、商業や金融関係の人々が情報を得るために集まって来、まさに、イギリス経済の心臓部といえる。

Barbican は、この City のすぐ外側に新設された高層住宅地である。2階の床面に人工地盤の道路をつくり、人間生活はそこから上で、完全な歩車隔離のシステムである。Barbican 地区を見れば、イギリス人が目指す“人間的な生活”の一端を知ることができるであろう。ロンドンは、公園、緑地の面積においても、一人あたりの緑地比率においても、巨大都市としては世界第一の都市であり、Barbican 地区も多くの公園・緑地を持つ。ここにもロンドンが人間的な都市であることを強く感じるのである。ただ、他の地区で見えてきた数々の古い建物や、保守主義のシンボルのようにいわれるロンドンのことを考えると、新しい地下鉄の駅 Barbican より目の前に広がる、真っ白な建設中の数々のビルディングは、何か異様に思える。そこには、長年の経験でよいとわかっているものを変える必要はないという考え方と、同時に、変えねばならないものは積極的に変えてゆくという進歩的な一面を見ることができる。

これは、ロンドンをはじめ、各地に見られる都市改造などにも見受けられる。具体的には、1977年ロンドンの玄関 Heathrow 空港と都市 Piccadilly を地下鉄で直結したことなどがあげられる。

Barbican 地区の開発の中心になるのは、新しい住宅建設(6,000人)であるが、人間的な生活を送るに必要なあらゆる機能を備えようとしている。- 多くの公園、緑地、学校、数々の店舗、その他サービス施設 とりわけ、重点が置かれているのは、文化・芸術活動、交歓の場である。

その中核が 1981年完成の Barbican Centre である。Centre は、会議場、展示会場、劇場、コンサートホール、映画館、図書館、美術館、レストラン等で構成され、まさに、文化・芸術活動、その他娯楽に必要な市民の場を中心とした集合体である。来春完成の神戸ポートアイランドが「住み」「働き」「憩る点」において相異はあるが、根底に流れる概念、すなわち、「住み」「働き」「憩い」「学ぶ」という都市機能を充実させ、市民生活にうるおいを与えるという点においては、共通性を見出すことができる。

では、なぜ、このような Centre を中心として、Barbican 地区を再開発する必要があったのか。歴史

的に見るならば、ロンドンは 1666 年の大火及び第二次世界大戦による空襲という 2 度の大きな惨事により、都市はすっかり破壊されてしまった。その度に再建に力を入れたのだが、ロンドン市の住民の数は激減していった。このあたりは、昔から、商業、金融の中心であるから、勿論、日中は多くの人々でざわめく。しかしながら、夜や週末になると、一人一人見えないゴーストタウンと化してゆくのである。こういった背景から生まれたのが、ビジネスのみの地域ではなく、文化芸術活動にふさわしい環境を備えた、一つの独立したコミュニティー作りである。その中にあり、都市におけるビジネスの発展と同時に文化・芸術活動の促進を目標とし、その媒体として必要な場 Barbican Centre が建設されたのである。

会場としては、2,000 人収容のホール(Barbican Hall)、その他シアター形式で 275 人収容 2 室、170 人 1 室、セミナー用のミーティング・ルームが 5 室(1 室 80 人)、その他 25 人程度収容のディスカッション用の数々のミーティングルームや VIP 用の控室、Press 用の部屋がある。更に、この Centre が大きな特徴をなすのは、1,160 人収容の劇場(Barbican Theatre)である。ここには、有名な Royal Shakespeare Company が常駐し、この国立劇団が政府の援助を受け、ここを基盤として演劇活動を展開してゆくことになる。舞台芸術が盛んな都市、ロンドンならではのことである。又、Barbican Hall でも、ロンドン シンフォニー オーケストラによるコンサートが年間通して数多く開催されることになっている。

Barbican Theatre は演劇ばかりでなく、500~1,000 人の会議にも使用できる。Barbican Hall (2,000 人)、Barbican Theatre(1,160 人)、Barbican Cinema(275 人)の 3 会場をモニターTV 等を使用して、同時並行で総会等を開催することもできるので、最大、約 3,500 人規模の会議までは受け入れることができる。しかしながら、会議場としての機能をどこまで果たしていくことができるのであろうか。ロンドンのシアターを「一年中輝いている太陽」のようなものだと言ったのは、ロンドンのある劇場の支配人である。私の見た範囲、感じたところにおいても、舞台好きのロンドン市民に支えられた劇団、毎晩、満員になる数多くの劇場は、まさに、「輝く太陽」である。Barbican Theatre も多くの市民が集まり、毎晩のように演劇を楽しむことになるであろう。Barbican Hall でのコンサートにもそのことがあてはまるだろう。しかし、Barbican Centre が Arts Centre のみならず、どこまで Conference Centre でありえるか、又、商業、貿易に関しては 800 年の歴史を持つロンドン市をバックに、どこまで business meeting places になりえるかが、今後、注目される場所である。

では、現在、スタッフはプロモーションのためにどのような活動を繰り広げているか。Conference Director, Mr. Martin Kinna によれば、数年先の予約もかなり入ってきており、ひき続き、いろいろな association, organization とコンタクトをとっているとのことである。情報源としては UAI の Year Book と ICCA の Bulletin をかなり利用している。決して十分とは言えないが、Key Person がわからない時、コンタクト先を調べるため Year Book や Bulletin の情報によるところが多い。AMK Berlin のように東京をはじめ世界主要都市に出かけ、ビジネスマンや研究者とのコンタクトを密にしたり、Key Person を集めてスライドのプレゼンテーションを行ったり、セールス活動にもっと力を注ぐことを希望してはいるが、まだ、その段階まで行っていないようである。ただ、ねらいを定めている一つとして東京のビジネスマンの情報は現在、ほしくて仕方がないといったところである。こういった活動は Centre のスタッフが中心となり推し進めてゆくというよりも、ロンドン市、コンベンション・ビューロー、コンGRESS オーガナイザー等の協力により行うといった傾向が強い。(オーガナイズの仕事も、ヨーロ

ッパには多くのプロフェッショナル コングレス オーガナイザーが既にいるため、彼らに任せ、常に協力関係を維持していくことに努めている。)

1981年7月の会議を皮切りに、ひき続く会議を前にして、現在は会議要員(登録受付、会場係、インフォメーション、タイピスト、秘書等)の集中的な養成のための準備に終わっている。81年7月の会議は参加者約200名の小さな会議であるが、作家の集まりという、Barbicanにはふさわしいデビューといえよう。が、その後、どのような会議が引き続いてゆくのか、大きな関心をいだくところである。

アムステルダム空港の玄関口、超近代的な世界一流の空港、スキポール空港（Schiphol Airport）より約 14Km のところに、約 20 年の歴史を持つ国際会議・展示会施設、RAI センターがある。センターの建物、敷地は、大きく国際会議センターと国際展示会センターに分かれる。ただ、展示会場 50,000 m² に対し、会議施設はそれほど大きいとはいえない。実績をみても、会議件数もあまり多くなく、展示会、見本市に大きな比重がかかっている。オランダから輸出される物品の 70% は工業製品で、輸出メーカーの多くは多国籍企業というこの国において、主産業は運輸、商業と中継貿易、とりわけオランダは北海の交通の要衝に位置し、ライン、マース、スヘルトの三大河が流れ込んでいることから、中継貿易が極めて盛んである。こういう都市にあって RAI センターが展示会、見本市等において、ビジネスの場を提供していることは、単に施設を提供するというより、もっと重要な意味を持つのではないだろうか。

会場そのものに関しては、それほど大きくなく、1,500 人収容の大ホール（Groot Zaal: 1,280 auditorium, 220 balcony）も広々とした感じは受けてない。その他 450 人：288 人：240 人収容のホールが各々一室、ミーティングルームとして、200 人収容 2 室、100 人 1 室、40 人 4 室等である。セクレタリーやプレス用のオフィススペースも狭い。雰囲気という点からみても何か全体に趣きに欠ける。ラウンジもブースや机と椅子を準備して商談の場として重要視しているが、今一つムードに欠ける。ただ、訪問中に開催されていた会議の参加者の様子を見てみると、椅子と机さえあれば十分実りのある Face to Face Dialogue が成立し、商談が進むという印象を受けた。ムードや器の問題ではなく、集まる人間、論議の内容が第一というわけでしょう。このセンターの特徴としてユニークな点は、会議場裏の運河からひかれた池から、運河に面したホテルやアムステルダムの中心地には、船で直接行き来できるということである。ホテルに関しては、歩ける距離の範囲内でヒルトンやオークラ等、約 3,500 ベッドは確保でき、大型の国際会議・展示会にも十分対応していけるとのことである。現在、センター前の広場一帯は、1982 完成をめざして展示場を中心とした大ホールを増築中である。会議・展示会共、大型化してきた時代に備えてか、さて、この施設をいかにセールスし、運営してゆくことになるだろう。

展示場及び会議センターは、'RAI GEBOUW B.W.'によって運営され、この会社は工業会の協力を得て、いろいろな展示会オーガナイズしている。勿論、会場だけを貸し他のトレードフェア等のオーガナイザーの手に委ねることもある。一方、会議センターの活動は、主に施設を貸すことに向けられ、会議のオーガナイズの仕事は、'Organisatie Bureau Amsterdam B.V.'という子会社が一手に引き受ける。この会社も同じセンター内に事務所を持っているので、お互いのコミュニケーションは十分はかかっているといえる。実際の事務代行業務は約 5 人の女性専属スタッフにあたるせ、一つの会議に対して一人の女性を割り当て、2 年前ぐらいから、会議終了、事後処理（Organizing Committee に決算報告）に至まで一部始終のお世話をさせる。勿論、会議が近づいてくれば、もっと臨時スタッフを動員するが、会議準備状況すべてに熟知したその女性に指導にあたらせる。このようにオーガナイズの仕事は会議センター・スタッフの仕事と一応切り離されている。

では、センター・スタッフの活動、主にプロモーションに関してみればどうか。ICCA のもと Secretary General であり会議の長老ともいえる Mr. Bart Zijdenbos からマーケティングの専門家の立場からお伺いした。会議情報源として、ここでもやはり ICCA Bulletin や UIA の Year Book を利用している中で ICCA の Bulletin に対しては、かなりの批判がある。具体例を上げれば Bulletin の裏面はかなり空白が多く、各国の Participant や key person のリストが手に入るかどうか、わからないことが多い。Mr. Zijdenbos ほど長年会議産業に携わって来た人であれば、多くのパーソナル・コンタクトにより、いろいろな association や organization 等の関係者から入手した会議の情報がずっと早く、正確なのである。自国の key person を探りあてコンタクトを持つにも、ICCA Bulletin の情報に頼るまでにいろいろな情報網があるわけである。また、毎週コンピューターで更新され、会議情報がメンバーに届くわけであるが、空欄が多かったり更新箇所があまりないのに送付されてきたりする。このことを考えると、この情報サービスにかかる労力やコンピューターの経費にはかなり無駄が多いというわけである。その他にも現在なら 2 年先以降の会議を追いかけていなければならないのに、81 年の Bulletin が、また、まだ更新され、送付されてきたりしていることを指摘する。

ここで KIICH の Bulletin に対する評価を付け加えておく必要がある。国境を越えても電話 1 本で情報のやりとりをするのが常であり、ヨーロッパ各国へ出かけ関係者と Face to Face で話が進められるヨーロッパとは違い、東の果てにある私たちにとれば、まだ、かなりの情報を Bulletin を通じて知ることができる。日本で会議を開催するならば、counterpart となる人物、各種国際団体の日本における key person、そういった情報はまだまだ手に入れるには苦労を要する。そういう場合、Headquarter に問い合わせし、情報をさらに増やしてゆくまでのステップとして Bulletin は十分利用価値がある。

Mr. Zijdenbos が語るマーケティング、プロモーション活動の最大のポイントは local な counterpart とできるだけ多くのコンタクトをもつこと、そこを通して Headquarter にアプローチすることにある。受け入れるのは local な organizing committee であるから、それは当然のことに違いない。local な counterpart、key person の重要性、パーソナル・コンタクトの重要性はよくわかる。ただ、key person の情報をどのようにつかみ、いかに強いコンタクトを持つかの問題である。ただ、このことばはそのままドイツ AMK Berlin に対する忠告として受け取れた。多くの予算を持つ AMK Berlin は世界を股に掛け、主要都市に於いて、パーティーに decision maker 等を招待すると同時に、フィルム・プレゼンテーションを行ったり、積極的なセールス活動を展開している。しかし、ヨーロッパにおいては、あまり成果が上がっていないようであり、自国での counterpart とのコンタクトが疎かになっていることも指摘される。

RAI センターには、決して派手やかさはない。オランダの歴史は常に海との戦いといわれる。又、第二次世界大戦ではドイツに占領され窮迫のどん底に落ち、戦後には東インド諸島（インドネシア）を失った。そして、狭い国土に人口密度世界一という苦況に立ったが、その中で資本、貿易を自由化し、外国企業の進出を認めるポリシーを推力として、運輸、製鉄、造船、機械工業、電子工業、石油産業等に発展をとげた。その歴史は、現実主義で忍耐強く、理性的で地味なオランダ人を知る材料となる。私は RAI センターの地味ではあるが着実な今後の歩みを見る思いがした。

THE VIENNA COVENTION CENTER HOFBURG

A 1014 Wien, Heldenplatz, AUSTRIA

ハプスブルグ王朝がヨーロッパの大部分を支配し、「太陽の沈まない」帝国としてオーストリアが幾世紀かの間、国際政治上重要な役割を果たしてきたことは、歴史が語るところである。ナポレオン戦争後、1814～15年に、この首都に於いて、ウィーン会議が開催され、その決議がヨーロッパ再編に及んだのは、皆の知る事実である。二つの世界大戦がもたらした苦悩の時代を経、1945年になって初めて、国内及び国外の双方において、統合への過程が見られるようになった。1955年11月26日オーストリアは永世中立をもって外交政策の基礎とし、世界平和を保持するため、積極的に役割を果たすことを貼彼らの義務とした。1955年12月14日、オーストリアは国際連合に加盟し、国際社会に於いての位置を確立していったのである。その背景には種々の重要な機構における、それ以前のオーストリアの果たした役割、実績に対しての世界の評価の高さを忘れることはできない。1例をあげれば、1947年からは、FAO(食糧農業機関)、WHO(世界保健機構)、UNESCO(国際連合教育科学文化機構)、ICAO(国際民間航空機構)、そして、1951年からは、GATT(一般関税貿易協定)等の一員として活躍したのである。

このオーストリアにとって、最大の願いは、国際機構のホスト国家となることであった。既に1957年には、早くもIAEA(国際原子力委員会)が設立され、ウィーンをその本拠地とした。1973年にはUNSCEAR(国際連合原子力放射能効果科学委員会)の事務局もまたここに置かれることになった。1967年に設立された国際連合産業発展機構もまた、一年後にはウィーンに公式の所在を持つに至った。

オーストリアは今まで、そして今も幾多の国際連合の団体や委員会で積極的に活動している。1971年、オーストリア人のDr. Kurt Waldheimは国際連合事務総長に選ばれたが、1976年には、さらに5年間の留任が確認された。このことは単に事務総長個人の能力によるものではなく、オーストリアという国が長年にわたり、国連等多くの国際機構に於いて果たした役割の重要さを示すものであろう。

こうした背景を基に、着実に歩んできた会議場、The Vienna Convention Center Hofburgがある。ハプスブルグ王朝代々の王宮、そこには輝くばかりの居室が数々ある。そのホフブルグ王宮の一角を占めるのがこの会議場である。会場そのものにはそれほど大きくないが、雰囲気という点から見れば、最高であり、他に類を見ない会議場といえる。最大ホール(THE FESTIVAL HALL)は1200人収容であるが、バンケット・ホールやダンス・ホールとしても使用できる。会議としても400人収容できるTHE CEREMONIAL HALLはハプスブルグ王朝代々の皇帝の居室であり、主としてバンケット・ホールとして使用される。その他600人収容のホールやUNスタイルで190人収容ホール等が主なホールである。

ホフブルグ王宮がconvention centerとして使用されるようになったのは1958年以降のことであるが、当初は政府役人により運営されていた。あまりよい成果が得られなかったため、やはりこのような運営はビジネスに長けた人間にやらせた方がよいということで1969年に現在の会社が成立した。以来大きな成功をとげてきた会議場ということがいえるであろう。この会社の12のshareholdersはすべてホテルであるが、専属のスタッフとしては約20名しかおらず、会議がある時だけ一時的に雇うという形をとっている。ヨーロッパには、多くのプロフェッショナル・コングレス・オーガナイザーの会社があるため、ここでもオーガナイズの仕事は彼らに委せるという形をとっている。ただ、All under

one roof という考え方は共通であって、同じ会議場内に廊下を隔ててセンターのオフィスとコンGRESS・オーガナイザーの別会社のオフィスがある。

では、マーケティング、プロモーションに関して、スタッフの活動はどうか。実際は、少人数のスタッフで運営しているため、マーケティングのセクションを特別に持っているわけでもなく、これは General Manager, Mr. Ernst Stock 一人が、彼の幅広いパーソナル・コンタクトを十分生かして、活躍しているといえるであろう。大まかにプロモーションの手段を上げるなら以下ようになる。

- (1) パーソナル・コンタクトを幅広く持ち、そこから可能性のある会議情報が入れば、key person に会うために国内外を問わず訪れる。ただし、あくまでも、local committee、オーストリアにおける counterpart に重点をおく。
- (2) ツーリスト・オフィス、コンベンション・ビューロー、エアー・ライン、エージェント、ホテルの協力を得、key person、decision maker をパーティーに招待し、同時に会議場の施設、サービスの紹介を行ったり、都市に関することや会議場までのアクセスに関するインフォメーションを与える。
- (3) key person にこの会議場で Executive Committee 等その他重要な会議をやっていただく。
- (4) (これはオーストリアが特別に有利な立場にあるのであるが)さらにもっと多くの国際機関の本拠地をウィーンとする。現在も、会議センターのスタッフが活動しなくても、ウィーンに本拠地をもつ機関の会議は自動的に Hofburg の会場に決定されている。センターのスタッフ以外に無償で会議の誘致活動をしてくれる人々がいるわけである。
- (5) Austria National Tourist Office, Vienna Tourist Board やプロフェッショナル・コンGRESS・オーガナイザーと協力してプロモーションにあたる。(ただ、Vienna という都市をプロモーションするのは、それは市にとって大きな利益となるのであるから、市が予算をとって、Vienna Tourist Board を中心にプロモーションするのが当然であるとの Mr. Stock の意見。)
- (6) Hofburg 会議場と、メディカル・コンベンション・オーガナイザー、Vienna Tourist Board、製薬工業が協力し、一つの Association のようなものを形成している。そこにおける General Manager を中心とした仕事は、その分野における、中心的な存在である教授を会議の site を決定するための重要な会議(それが世界各国どこで開かれても)へ送り込み、そこで、Vienna に会議を誘致するために必要な、あらゆる下準備、オーガナイズをする。これはまだ始めて1~2年ぐらいであり、現在は製薬関係のみだが、このようなグループをいろいろな分野にわたって結成してゆくことをかんがえている。

Vienna は非常に美しい都市であり、多彩な芸術、文化を味わうことができる。また、Hofburg の会場はもと宮殿という最高の雰囲気をかもしだす。さらには、ニューヨーク、ジュネーブに次ぐ、第三の国連の本拠地にまでなろうとしている。こうした要因が、会議 site 決定に非常に有利に働いていることは、否定できない。ただ、見逃せないのは client にとってスタッフのコンサルティング対応がいかに強い印象を与えているか、ひいては、それが site 決定に結びつくかである。彼らは decision maker のあらゆる質問に対して即座に答える。勿論、最大のポイントは、いくら予算でおさまるかということである。質問は、単に会場関係の問題だけでなく、会議準備費、観光、ホテル、フライトに関してなど、あらゆる範囲にわたってくる。オーガナイザーのオフィスがすぐ前の部屋であったり、tourist board のオフィスも近くにあり、1 個の会議場への訪問で、すべての質問が解決できたという印象を持

って帰っていただくことを心掛けている。多くの Price List も必要なく、そのスタッフ一人がすべての質問にお答えしますというやり方と、その機敏な対応が非常に印象的であった。

PALAIS DES CONGRES

2, Place de la Porte Maillot, 75017 Paris, FRANCE

パリ国際センターは、規模の上でも設備に関しても一級といえる。シャルル・ド・ゴール空港よりバスで30~40分のエール・フランス、エアー・ターミナル(Porte Maillot)を地下に持ち、地下鉄にも直結する。センターには、パリを一望するタワーホテル、コンコルド・ラファイエット(1000室)が隣接し、メリディアン・ホテルをはじめとする、その他のホテルが近くにあるため、大型会議の参加者の宿泊は十分可能である。さらにセンター内にはパリの高級街として80軒のブティックが建ち並び、その他映画館、ピヤホール、ナイトクラブなどもある。会議のみならずコンサート、観劇、晩餐会などの総合施設として、また、ショッピング・センター、ホテル、エアー・ターミナルの多数の利用者もあり、様々な目的を持つ多くの人々が集う場となっている。ただ、この超近代的な建物を見たとき、何か違和感を覚えることは事実である。すぐ近くのシャンゼリゼから中心部に向かうと、多く古い建物を目にする。古い町との調和を守るためには莫大な労力とお金を惜しまないのがフランス人である。エミール・ゾラが“パリの胃袋”とよんだレ・アル(中央市場)は諸般の事情からとり壊され、その広大な地域には近代建築群が建つことになっていたが、ジスカルール・デスタン大統領は、すでに消費した莫大な費用を犠牲にして、この計画を破棄した。そして、地上は平らで地下数階に文化センター、ショッピングセンターを1979年に完成させたことは、地下街に外光を取り入れる斬新な設計とともによく知られている。パリ国際センターの超近代的な建物を前にして、ここでも、進歩的な姿勢と古いもののよさを守る心の調和を見る思いがした。

会議場施設としては、100人から4,100人まで収容できる20の会議場及び50の事務室・個室があり、さらに5,000㎡の面積をもつ展示場がある。4,100人収容のホールは、会議のみならず、コンサート、ショーなどにも使用されている。大ホールは会議に利用するのは年間20回くらいで、むしろ、コンサートなどに毎晩使用し、満席になるということである。

センターは1976年にパリ市が土地を提供し、パリ商工会議所が全額出資をして建設されたものであるが、会議場運営は第三セクター、Societe des Exploitation de Palais des Congresによって行われている。又、世界主要都市 ニューヨーク、モントリオール、ブラッセル、ロンドン、ミラノ、ジュネーブ、ケルン、東京に海外事務所を開設しPR活動を行っている。海外のセールス活動としては、ヨーロッパ、アジア(特に日本)、北米、南米担当というようにスタッフが分かれており、前回の会議、その他関連のある会議には世界各国どこにでも出かけてゆき、関係者とのコンタクトを強めたり、ブースを設けてPR活動を行ったりしている。

彼らも、国際会議誘致活動においてコンベンションビューローなどの協力は期待しておらず、自分たちスタッフで開拓してゆくという姿勢である。現在、マーケティング及びセールス活動にあたっては、約11~12人である。

昨年3月よりワードプロセッサーを導入し、プロモーション活動において、大きな成果を収めていることは、注目に値するところである。利用方法の一つを上げると、ICCA Bulletin等を検討し、フランスで開催する可能性のありそうな会議に関しては、すべて、Headquarterとlocal committeeのkey personの連絡先をインプットし、数種のプロモーション・レターもプロセッサーでアウトプットし、

各種団体に送付している。返答は可能性をさらに分析し、必要事項はプロセッサにインプットし、レターはファイルに収め、コレスポネンスは引き続き行っている。導入後まだ1年半程しか経っていないが、非常に成果が上がっているとのことである。

現在、さらに推し進めているプロジェクトは数年先の会議に関する色々な情報をプロセッサにインプットし、可能性のある会議を分析するのに利用することである。私たちは、80年代に世界各地で開催される会議に関して、その会議の過去の開催地、専門領域、規模、頻度などをもとに日本開催の可能性のある会議の情報を、オフィス・コンピュータに処理させるため準備に入ったが、センター・スタッフもまた同じことをワードプロセッサを利用してスタートしようとしていることは、非常に興味深い。それぞれの使用状況及びその成果に関する意見交換、同時にパリ、京都各々が求める会議情報の交換を密なものにしてゆきたい。

コンベンションセンター間の強い協力関係を築き上げることにより、会議情報はすべてセンターが握る。ひいては、それがコンベンションセンターの会議産業における中核的な位置を築いてゆく—そういう考えを強く抱き、私たちの情報交換を実のあるものにしてゆきたいという願いが終始感じられた。ヨーロッパとアジアという位置にあってお互いに競合することは考えられない私たちにとっては、尚更のことである。

I C C AにおいてもGカテゴリー（コンベンションセンター）のメンバーの結束はさらに強まり、Gカテゴリーのミーティングも内容の充実したものになってゆくことは期待できる。例えば、5月にパリで開催されたGカテゴリーのワークショップはK I C Hは出席していないが、大きな成果があったと聞く。このワークショップはイギリス、Brightonにはじまり、第二回はドイツ、Hamburgで、今年が第3回目であった。ワークショップにおいて注目されるのは各センターが今後海外に於いてある一定の参加者数以上の規模の会議を開催する予定の client を引き連れワークショップに出席する点である。そこにおいては、開催希望のコンベンションセンターと client の十分な対話の場と時間が設定されている。I C C A General Assembly のように形式的ではなく、このワークショップは実際の内容に富む有意義なものであると出席者であるパリ国際センター Commercial Director Mr. Francois d'Heilly は語る。

最後に

ヨーロッパの会議場センター訪問を終え、訪問先は多くはないが、会議場センターの特徴が、いかに、その都市の性格を映し出しているか、同時に、センターがどれほど深く都市に影響を与えているかを強く感じた。都市と会議場センターが様々な相乗作用をひきおこし、互いの成長、発展へと繋がってゆく。Barbican Centre に於いては、商業、金融の中心地という都市の性格が、多くのビジネス・ミーティング開催へと繋がり、それが更に、都市の経済を活発化させことになる。センター内に劇場、コンサートホール、図書館、美術館などを建設することが、文化・芸術活動に刺激を与え、一方では、その活動を支える市民のための新しい住宅建設、コミュニティづくりをする。

R A I センターは、商業、中継貿易の極めて盛んなアムステルダムをバックに展示会・見本市により大きな実績を収め、一方、展示会・見本市に世界から多くの人々を集めることにより、アムステルダムひいてはオランダの商業・貿易の振興を目指している。

ウィーンに関してみれば、多くの国際機構のホスト国家になることを目指すオーストリアの首都として、第三の国連本拠地と呼ばれるにふさわしい活躍をしている。そういう都市の性格を十分生かして Vienna Convention Center Hofburg は成長してきた。しかしながら、他方では、民間レベルの運営、ビジネスに精通した人間のやり方が、会議場を支え、多くの会議を引き付ける。そして、ウィーンでの会議参加者の消費額が、ウィーンの大きな観光収入に結びつく。

パリ国際センターに至っては、会議、展示会、コンサート、オペラ、演劇、あらゆるものを開催し世界中より多くの人々を集め、センターを売ることでパリ市が活動すべきところまでパリを売っているという気がする。勿論、パリという都市は多くの人々が必ずや訪れたいと思う程、底知れない魅力をそれ自体が備えているということは言えるであろう。

ヨーロッパの会議場のスタイルを日本に当てはめることは当然できない。他方、コンベンションはホテルで行うのが普通であるアメリカのスタイルのように、現在、東京を中心に '80年代の商品はコンベンションとばかりにホテルの力のいれようは恐ろしい程である。その中であって、専門会議場として14年間歩んできた K I C H がどういう路線を歩むのか？そう問い続け、今回の訪問を終えたのである。